実践研究

運動遊びにおける「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」育成の可能性Ⅱ

煙　山　千　尋　　西　川　正　晃
岐阜聖徳学園大学教育学部

A study of the upbringing possibilities for optimal maturation until the end of childhood by utilizing exercise-playⅡ

Chihiro KEMURIYAMA, Masaaki NISHIKAWA

キーワード：幼児期の終わりまでに育ってほしい姿　環境の質　運動遊び　保育者のかかわり方

Ⅰ．研究の背景と目的（はじめに）

これまでの研究で筆者らは、幼児の自発的な活動としての遊び、特に運動遊びに注目し、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の力を、具体的な体験としてどのように蓄積しているのかを分析してきた。その成果について、自発的な運動遊びは、発達の視点として存在する５領域それぞれに、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」全ての視点が発揮されることが明らかになった。さらに、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、各視点で単独で表出されるものではなく、他の視点と相互にかかわり合って存在し、複合的に発揮されていることも明らかになった[1)]。

これまでの研究によって、自発的な運動遊びにおいて「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が発揮されることは認められた。しかし、育成の可能性として考えられる物的・空間的環境はもちろん、保育者を含む人的環境も含めた環境構成の分析には至っていない。運動遊びはもちろん、幼児期の遊び全ては一方向的に教えられるものではなく、子ども自身の興味・関心に基づいた主体的な活動である。それを支えるものが環境であり、幼児教育が環境を通して行う教育と示される所以である。環境の質を高めることが幼児教育の質向上であると言っても過言ではない。物的・空間的環境の質はもちろん、幼児の主体性を保ちながらの保育者のかかわりなども、環境の質として大きな意味をもつ。

そこで、本研究は、運動遊びを切り口に、道具・遊具などの物的・空間的環境や、保育者のかかわりも含めた幅広い環境の質を分析する。さらに、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の育成の可能性を明らかにすることを目的とする。

Ⅱ．研究の方法

本研究は、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の育成の可能性を明らかにするために、環境の質を分析する必要がある。その分析のスケールとして、本研究はMOVERS (Movement Environment Rating Scale)[2)]の各サブスケール及び項目を客観的基準とし、幼児の運動遊びのための環境の質について考察を行う。

分析対象となるエピソードについては、岐阜市にある社会法人Ｈ子ども園の保育実践における園庭での遊びを観察する。観察は、2019年８月29日（木）、９月10日（火）、９月11日（水）の３日間行った。保育者側から設定された保育者からの一方向的・注入的な保育実践ではなく、幼児が自発的に遊びに向かう、自ら選んでする遊びが展開されている生活の中で、特に運動遊びを中心にビデオ撮影を行った。夏から連続する水遊びやどろんこ遊び、運動会に向けた竹馬遊び、竹製ののぼり棒を用いた遊びなどが展開されていた。そのいくつかの遊びを抽出し、MOVERSの各サブスケール及び項目を客観的基準とし、幼児の運動遊びのための環境の質について考察を行う。さらに質検証を通して、本研究の目的である「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」育成の可能性を明らかにする。

Ⅲ．体を動かす遊びのための環境の質評価スケール

運動遊びの環境を検証するにあたり、明るく伸び伸びと行動し、充実感を味わったり、自分の体を十分動かし、進んで運動しようとしたりするねらいを掲げる領域「健康」について、その領域からみた環境の意義について明らかにする。さらに、今回スケールとして使用する、体を動かす遊びのための環境の質評価スケールであるMOVERSについても概観し、その特徴を整理しておく。

１．領域「健康」における環境

幼稚園教育要領第２章第２節　各領域に示す事項[3)]

〔健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う。〕
1　ねらい
(1)明るく伸び伸びと行動し、充実感を味わう。
(2)自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする。
(3)健康、安全な生活に必要な習慣や態度を身につけ、見通しをもって行動する。

幼稚園教育要領に示されている領域「健康」のねらいである。幼稚園教育要領解説には、表面的な活発さにとどまるだけではなく、能動的に環境にかかわり自己を表出することで、内面の充実を図ることが大切であると述べている。すなわち、上記のねらいを表面的に達成することだけではなく、自己充実に深く関わっていく必要がある。その方法として環境に主体的にかかわる姿が求められる。

環境を通して行う教育である幼児教育は、環境との相互作用を通して具現化されていく。したがって、幼児を取り巻く環境の意味が重要になってくる。相互作用が成立するためには、保育者の一方向的な働きかけでもなく、また、保育者のかかわりが全くないことでもない。環境に子どもの必要感をちりばめ、子どもの必要感から保育者が援助しかかわっていくことで、子どもの主体的な遊びが展開されていく。すなわち、物的・空間的環境と人的環境が整うことが遊びの大前提となっていることがわかる。

運動遊びを見ても、「自分から」体を動かす姿が重視され、「幼児の興味や関心」から出発し、「幼児が進んで」楽しむことが大切であると領域「環境」の内容に述べられている。幼児自らが積極的･主体的に選択できる物的・空間的環境構成の重要性が指摘されている。さらに、内容の取り扱いには保育者の存在についても述べられ、信頼に基づいた関係性からの安心・安全、温かい触れ合いなど、自然に体を動かしたくなる人的環境の重要性も指摘されている。

佐近によれば、保育環境を広げ、園外の資源を活用することで、調整力の向上を図ることが可能であると述べている。さらに、設定しない保育（登園時、降園時の自由時間）においての運動遊びの活発化を認めることができた。このように、時間を含めた物的・空間的環境の構成が運動遊びの活性化の要因になっていることが報告されている。同時に、2016年の測定結果において、構造の影響による運動能力差が是正され、物的環境差を人的環境により強化した影響も確認されている。このように、物的・空間的環境のみならず、人的環境の重要性も指摘されている[4)]。さらに、村田は人的環境の重要性について、子どもにとって指導的立場の存在だけでなく、言葉がけは器具や場所と同じくらい重要な環境だと考えている。遊びに積極的に入ることはもちろん、内発的動機による行動を促すため「命令形や否定形の言葉は使わない」、「過度な賞賛はしない」、「ほかの子どもとくらべない」などを実践している[5)]。先行研究を見ても、運動遊びにおける環境の重要性は言うまでもないが、物的･空間的環境に加え、保育者の存在やかかわりなど、人的環境の重要性が伺える。

２．体を動かす遊びのための環境の質評価スケール

本研究で今回参考にするスケールMOVERS（Movement Environment Rating Scale）[6)]は、イギリスのキャロル・アーチャーとイラム・シラージによって開発された「体を動かす遊びのための環境の質」評価スケールである。これまでにも環境評価スケールは存在し、広く知られている。これまでの環境評価スケール[7)8)]は、空間と家具・個人的な日常のケア・言語-推理（乳児版；聞くことと話すこと）・活動・相互関係・保育の構造・保護者と保育者の７つの環境の要素から、保護されることや社会的・情緒的発

達の保障のこと、知的発達が保障されることの測定にその注意を向けられてきた。これらの評価スケールは、地域ごとで、複数の保育機関が同時期に保育環境評価スケールにより保育の質を測定することで、それら保育機関が提供する保育の質について数値を用いて表すことができ、比較検討が可能になり、政策的根拠を求めての調査研究に用いられてきた。

しかし、これらの評価スケールは保育全般の質の評価であり、幼児の人体の発達、運動発達を測定するにはMOVERSが適当であると考えた。MOVERSは「身体発達のためのカリキュラム、環境、資源」「身体発達のためのペタゴジー」「身体活動と批判的思考を支えること」「保護者と保育者」の４つのサブスケールと、個別に評定される11の項目から構成されている（表１）。MOVERSには、先にも述べた、物的・空間的環境の視点に加え、人的環境である保育者のかかわりも項目化されている。

表１　MOVERSのサブスケールと項目[9)]

【サブスケール1】身体の発達のためのカリキュラム、環境、道具や遊具
項目1：身体活動を促すための環境空間を作ること
項目2：可動式・固定式の設備・備品を含む道具や遊具を提供すること
項目3：粗大運動スキル
項目4：微細運動スキルを支える体の動き
【サブスケール2】身体の発達のためのペタゴジー
項目5：保育者が、屋内・屋外で子どもたちの動きにかかわること
項目6：屋内・屋外で子どもたちの身体の発達を観察し評価すること
項目7：屋内・屋外における身体の発達のために計画すること
【サブスケール3】身体活動と批判的思考を支えること
項目8：子どもたちの動きに関する語彙を支え、広げること
項目9：身体活動を通してコミュニケーションをとり、相互にかかわることで「ともに考え、深めつづけること」を支えること
項目10：屋内・屋外で子どもたちの好奇心や問題解決能力を支えること
【サブスケール4】保護者と保育者
項目11：子どもたちの身体の発達と彼らの学び、発達、健康により育まれるものについて保育者が家庭に伝えること

さらに、MOVERSに関連する乳幼児期の発達について５つの領域に分類し、各項目との関連性も明らかにしている。１つ目の領域は「身体的発達」で、項目３：粗大運動スキル、項目４：微細運動スキルを支える体の動きが該当する。２つ目の領域は「コミュニケーションと言葉」で、項目８：子どもたちの動きに関する語彙を支え、広げること、項目９：身体活動を通してコミュニケーションをとり、相互にかかわることで「ともに考え、深めつづけること」を支えることが該当する。３つ目は「自己統制」で、項目３：粗大運動スキル、項目４：微細運動スキルを支える体の動き、項目５：保育者が、屋内・屋外で子どもたちの動きにかかわることが該当する。４つ目は「認知的発達」で、項目３：粗大運動スキル、項目４：微細運動スキルを支える体の動き、項目８：子どもたちの動きに関する語彙を支え、広げること、項目９：身体活動を通してコミュニケーションをとり、相互にかかわることで「ともに考え、深めつづけること」を支えること、項目10：屋内・屋外で子どもたちの好奇心や問題解決能力を支えることが該当する。５つ目は「社会情動的発達」で、項目３：粗大運動スキル、項目４：微細運動スキルを支える体の動き、項目８：子どもたちの動きに関する語彙を支え、広げること、項目９：身体活動を通してコミュニケーションをとり、相互にかかわることで「ともに考え、深めつづけること」を支えることが該当する[10)]。

研究の方法でも示したが、本研究は幼児が主体的に行う運動遊びを観察し、MOVERS の各サブスケール及び項目を客観的基準とし、幼児の運動遊びのための環境の質について考察を行う。ただし、サブスケール４の保護者と保育者にかかる項目については、表出される運動遊びの観察から分析できる評価項目ではなく、その背景となる保育者と保護者の連携となるため、今回の考察の基準からは外すことにした。

（西川正晃）

Ⅳ．MOVERS のサブスケール及び項目を基準とする運動遊びのための環境の質の考察

１．本研究にて取り上げる運動遊びの概要

本研究では、幼児が主体的に行う運動遊びとその環境を観察し、MOVERS の各サブスケール及び項目を客観的基準として分析をし、対象園の幼児の運動遊びのための環境の質について考察を行う。観察した時間の中で幼児による多くの主体的な運動遊びが観察できたが、その中でも、①竹馬遊び、②竹製ののぼり棒を用いた遊び（以下、のぼり棒遊び）の２つの遊びを取り上げる。そして、それぞれの遊びの中で具体的に観察された幼児や保育者の言動と MOVERS の各サブスケール及び項目とを照らし合わせ、運動のための環境の質を検証する。さらに、本研究により観察された運動遊びの環境の質の現状から、文部科学省[11] が提唱する幼児期の終わりまでに育って欲しい幼児の具体的な10の姿が育成される可能性についても考察を行う。

以下、①竹馬遊び、②のぼり棒遊びのそれぞれについての説明をする。

１)竹馬遊び

２ｍほどの２本の竹の棒の途中に足がかりがついており、そこに両足を乗せて２本の竹を実際の足のように動かして歩く遊びである（図１、２）。足がかりの高さは１～７まで段階的に高くなっており、数字が大きくなるほど足がかりが地面から離れて足場が高くなる。幼児は、自分が挑戦したいレベルの竹馬を使って遊ぶ。

２）のぼり棒遊び

直径約５㎝、長さ３ｍほどの竹の棒の片側が上部に固定され、地面に対して垂直に垂れ下がっている遊具を用いた遊びである（図３、４）。幼児は、２か所に（２本）あるこののぼり棒にぶら下がってゆらゆら揺れたり、ターザンのように振り子のような動きを楽しんだり、腕と脚を上手に使ってよじ登り、上部の固定部分に取り付けられている鈴にタッチするなどをして遊ぶ。遊び場の下は砂場になっている。

図１　竹馬遊び

図２　竹馬遊び

図３　のぼり棒遊び

図４　のぼり棒遊び

２．MOVERS のサブスケール及び項目に基づく運動遊びのための環境の質の分析

１）サブスケール１：身体発達のためのカリキュラム、環境、道具や遊具

サブスケール１は、運動遊びの場所や道具、遊具などの環境に関する内容である。具体的には、①身体活動を促すための環境空間を作ること、②可動式・固定式の設備・備品を含む遊具や遊具を提供すること、③粗大運動スキル[12]、④微細運動スキルを支える体の動き、の４項目から構成されている。

これらの視点から実際の運動遊びの環境を観察すると、対象園は、幼児が十分に遊びに利用できる空間や備品が十分に確保され、幼児が様々な動きをしながら安全に遊ぶだけの環境が整備されていたことが伺える。例えば、竹馬遊びの場所は広く確保されており、幼児同士がぶつかるなどの危険は確認されなかった。また、その空間には目視で気になる異物などは落ちておらず、裸足でも安全に遊ぶことができていた。竹馬には、足がかりの高さに応じて１～７の番号が振られており、幼児にも高さの違いが一目瞭然であり、異なる高さの組み合わせで遊ぶ幼児は一人もいなかった。さらに、竹馬遊びが行われている場所には、熱中症予防のためのシャワーミスト用のホースが設置されていたが、水を含んでたるんだホースの存在にいち早く気付いた保育者が、ホースを回避して遊ぶことができるよう即座に対処する様子が見られた。ホースがあることで直ちに危険が生じる状況ではなかったが、危険性が少しでも予測されることから迅速に対処したことが伺えた。この対応の前提として、保育者自身が幼児と一緒に竹馬遊びを行ったことでホースの存在に気づき危険性の回避につながったと考えられるため、保育者が幼児と同じ場所で同じ道具を用いて運動遊びを行う重要性が再認識された。

のぼり棒遊びにおいても、幼児が繰り返しぶら下がったりよじ登ったりしても、棒が折れたりロープが切れたりすることなく安全に遊ぶことができていたのは、保育者や用務員などのスタッフによる安全確認と定期的なメンテナンスによるものと想像できる。また、幼児が棒を登りきれるよう足元に滑り止め用の濡れタオルが置かれていたり、のぼり棒の頂点には目標となる鈴が固定されていたりするなど、幼児の挑戦的な運動遊びを最大限に引き出す配慮がされていた。

そして、双方の遊びには常に保育者が寄り添い、見守り、コツを伝授し、実際に保育者が挑戦して見せることもあった。特に、この２つの遊びは全身を使う運動であり、身体の大きな筋肉を使いながら細かい体重移動やバランス感覚が必要な運動である。これらの遊び以外にも、傾斜に水を流して滑り降りる遊びや、円柱型の形状の竹に足を乗せて歩く竹ぽっくり遊び、砂場での遊び、アスレチック型遊具を用いたなど、園庭では多くの遊びが展開される準備や工夫がなされており、幼児が主体的に自分の挑戦したい難度に合った遊びに挑戦する様子が観察された。

２)サブスケール２：身体の発達のためのペタゴジー

サブスケール２は、幼児に対する保育者の行動、応答、かかわりに関する内容である。具体的には、①保育者が、屋内・屋外での子どもたちの動きにかかわること、②屋内・屋外で子どもたちの身体の発達を観察し評価すること、③屋内・屋外における身体の発達のために計画すること、の３項目から構成されている。

竹馬遊び、のぼり棒遊びの両方において、保育者が幼児個々の発達発育や運動能力を考慮している様子が観察された。例えば、竹馬遊びにおいては、幼児は自分が挑戦したい高さの竹馬を自主的に選択して遊ぶ様子が見られた。また、より高い竹馬に挑戦したい幼児、足をつかずに少しでも長い距離を歩きたい幼児など、遊びの目標が幼児によって様々であった。そのような状況の中、保育者は、少しでも長い距離を歩こうとしている幼児に対しては、足がついた場所（到達した地点）に線を引いて「ここまで来れたね、さっきより遠くまで歩けたね、頑張ったね」、「次はどこまで行く？」のように声をかけ、次回の目標が明確になり更なる遊びへのモチベーションにつながる対応をしていた。これは、各幼児の目標に応じて幼児自身がやり遂げる様子を見守り、努力を認めることで、より高い質の運動遊びの発展が見込まれる重要な視点であると考える。また、幼児の運動遊びの様子を細かく観察していないと不可能な対応であり、保育者の洞察力の高さも伺えた。

のぼり棒遊びにおいても同様に、より高い場所まで到達したい幼児、少しでも長くぶら下がっていたい幼児、それらを他の子どもらと競争したい幼児など遊びの目標がそれぞれである中、安全面を考慮しながらそれぞれの幼児の運動能力や意欲に応じて遊びを支える様子が確認された。具体的には、「何秒ぶらさがる？」などと問いかけ、幼児自身が目標を設定することを支援していた。

３）サブスケール３：身体活動と批判的思考を支えること

サブスケール３は、幼児の関心を認め、新しい経験に挑戦する探究心や好奇心を支えることに関する内容である。具体的には、①子どもたちの動きに関する語彙を支え、広げること、②身体活動を通してコミュニケーションをとり、相互にかかわることで「ともに考え、深めつづけること」を支えること、③屋内・屋外で子どもたちの好奇心や問題解決能力を支えること、の３項目から構成されている。

観察した運動遊びでは、保育者が幼児と活発に言語的コミュニケーションを取る様子が観察された。具体的には、「『遠く』まで歩く」「『高く』のぼる」「『速く』走る」などの幼児の動きに関連する語彙を用いて声掛けをする様子が見られた。また、具体的な目標を言葉で確認し、子どもの挑戦する意欲を高める様子も見られた。

さらに、保育者自身が幼児と同じ遊びを実際に行うことにより、幼児のつまずきやすいポイントや、どのような点に楽しさを感じ達成感を覚えるかなど、感情や情動に寄り添ったコミュニケーションが可能になることが示唆された。さらに、幼児が主体的に運動遊びに関わる中で生まれた言動に関心を持って応答している様子が見られた。これらは、運動遊びが保育者主導ではなく、あくまでも幼児主体であり、幼児が挑戦や問題解決を積極的に行うために重要な保育者の理想的な態度であると考える。

Ⅴ.結語（おわりに）

以上、幼児の主体的な運動遊びの観察から、MOVERS のサブスケール及び項目に基づいて、対象園の運動遊びのための環境の質の分析を行った。この分析を通じて以下の３点が示唆された。

第１に、MOVERS のような評価スケールを基に運動遊びの環境の質を分析することが、今後も重要であるということである。これまで運動遊びの環境の質を評価する際、具体的に環境が整っている状態が不明確で曖昧であったため、運動遊びの環境を的確に評価することが難しかった。しかし、評価スケールを用いることにより、「幼児の運動遊びにはどのような環境が望ましいか」の根拠が明確になるため、より客観的に運動遊びの環境を評価・分析することが可能になると考える。

第２に、運動遊びの環境が整うということは、文部科学省が示す「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の育成の可能性との関連が深いということである。まず、言うまでもなく運動遊びは、「健康な心と体」が実現しないと成り立たない活動である。また、保育者やスタッフが幼児の遊具や道具などの環境を整備することにより、身近な環境への関心が高まり「自然との関わり・生命尊重」が育成できると考える。また、保育者が幼児の目標に応じてやり遂げる様子を見守り、努力を認めることにより、「自立心」、「豊かな感性と表現」、が育成される可能性が高い。また、保育者が多くの語彙を用いて遊びに関わることにより、「思考力の芽生え」や「数量・図形、文字等への関心・感覚」、「言葉による伝え合い」にも影響を与え、保育者が運動遊びを通じて相互にかかわることにより「協同性」、「道徳性・規範意識の芽生え」、「社会生活との関わり」が培われる可能性もある。このように、運動遊びの環境の質を総合的に向上することにより、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」も総合的に望ましく変容する可能性も期待できると考える。

最後に、幼児の運動遊びにおいて保育者のかかわり方や存在が重要であるということである。観察を進めると、保育者のいるところに幼児が多く集まって遊ぶ様子が見て取れた。また、保育者がそれぞれの幼児の運動能力や遊びの目標を的確に把握してかかわることにより、幼児の運動遊びがより活発になることがわかった。さらに、保育者自身が幼児と一緒に遊ぶことにより、幼児の感情や情動に寄り添った対応ができるだけでなく、危険性やつまずく点の把握にもつながることが期待できる。そのため、保育者が幼児と共に運動遊びを遊び込むことの意義は大きい。

本研究では、運動遊びの場所や道具・遊具などの物的・空間的環境、幼児の運動遊びに関心を持ち、新しい経験に挑戦することを支える対応など、保育者のかかわりなど人的環境も含めた幅広い環境の質について MOVERS を援用して考察した。今後、人的環境である保育者の運動遊びへのかかわりに着目し、保育者が子どもと一緒に遊び込むことによる影響について分析を行いたい。

（煙山千尋）

注・文献

1) 西川正晃・煙山千尋（2018）：運動遊びにおける「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」育成の可能性Ⅰ，岐阜聖徳学園大学教育実践科学研究センター紀要，18，79-86.
2) キャロル・アーチャー，イラム・シラージ（2018）：「体を動かす遊びのための環境の質」評価スケール―保育における乳幼児の運動発達を支えるために―（秋田喜代美監，淀川裕美・辻谷真知子・宮本雄太訳），明石書店，東京.
3) 文部科学省（2018）：幼稚園教育要領解説（平成30年３月），フレーベル館，52.
4) 佐近慎平（2017）：保育園の遊環構造の運動能力への影響の実態と是正プログラムの開発，日本体育学会大会予稿集，68，176_2.
5) 村田トオル（2016）：子どもが遊び込める環境構成の心理面に及ぼす効果について―元気っずクラブを通じて―，日本体育学会大会予稿集，67，211_1.
6) キャロル・アーチャー，イラム・シラージ（2018）：「体を動かす遊びのための環境の質」評価スケール― 保育における乳幼児の運動発達を支えるために ―（秋田喜代美監，淀川裕美・辻谷真知子・宮本雄太訳），明石書店，東京.
7) テルマ・ハームス・デビィ・クレア・リチャードＭ（2008）：保育環境評価スケール①幼児版［改訳版］（クリフォード著，埋橋玲子訳），法律文化社，京都.
8) テルマ・ハームス・デビィ・クレア・リチャードＭ（2009）：保育環境評価スケール②乳児版［改訳版］（クリフォード著・埋橋玲子訳），法律文化社，京都.

9) キャロル・アーチャー，イラム・シラージ（2018）:「体を動かす遊びのための環境の質」評価スケール― 保育における乳幼児の運動発達を支えるために ―（秋田喜代美監，淀川裕美・辻谷真知子・宮本雄太訳），明石書店，東京.
10) キャロル・アーチャー，イラム・シラージ（2018）:「体を動かす遊びのための環境の質」評価スケール―保育における乳幼児の運動発達を支えるために―（秋田喜代美監，淀川裕美・辻谷真知子・宮本雄太訳），明石書店，東京.
11) 文部科学省（2018）: 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会幼児教育部会審議の取りまとめ，http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/057/sonota/__icsFiles/afieldfile/2016/09/12/1377007_01_4.pdf，確認 2019年９月12日.
12) 体の大筋群（腕，脚，胴体など）を使用するものと、一ヵ所で生じる動き（曲げる、ねじる、飛び跳ねる、など）や、ある場所から別の場所へ移動する際の動き（這う、走る、スキップする、投げる、蹴る、など）を含むものとして定義されている。